

三河一色 大提灯まつり



約450年もの歴史を持つ、由緒あるまつり「三河一色大提灯まつり」。和紙で作られた6組12張の大提灯には、日本の歴史を題材とした絵物語と文字が色鮮やかに描かれ、その壮大さと華やかさは見る者を圧倒します。
大提灯まつりは、今年も8月26日(土)・27日(日)に開催されます。いにしえの心につれ、幻想的な世界を現地でお楽しみください。

大提灯の歴史

まつりの起源

大提灯まつりが行われる三河一色諏訪神社は、永禄年間(1558〜70年)に、長野県の諏訪大社から分霊を勧請し、一色の諏訪大明神としてまつたことが起源と伝えられています。当時の一色の戸数は、わずか27戸程度であったようです。
そのころ、毎年夏から秋にかけて海魔が現れ、田畑を荒し、人畜に危害を加えていました。そこで村人たちは神前に魔鎮の剣を供え、大かがり火をたき、海魔退散を祈願したところ、海魔は退散。以後、毎年まつりの神事として、かがり火をたくのが習わしとなりました。
これが、大提灯まつりの起源といわれています。海魔の現れた洲原を「魔の浜」と呼び、これが転じて現在の「間浜」という地名ができたようです。

かがり火から提灯へ

このかがり火をたく神事は100年ほど続きましたが、かがり火をたくことが不便だということで、提灯を作り、これに献灯するようになりしました。寛文年間(1661〜72年)のころのことで、当時は、竹ざおに提灯をつるす高張提灯のようなものであったと考えられます。

江戸時代中期になると、竹ざおが丸太柱に変えられ、提灯も大きくなり、その上部には屋根形の覆が付けられました。そして、次に伝えられた仏壇提灯は、提灯自体はあまり豪華ではなかったようですが、屋根形の覆全体に、彫刻や金色・朱色の塗りが施されていたようです。

二本柱時代の提灯

柱を両側に立て、その間に二張の提灯をつるすようになったのは、元文年間(1736〜41年)・寛保年間(1741〜44年)と考えられて

大提灯が揚がるまで

②カグラサン(万力)を使い、氏子たちが柱の上に屋根形の覆をつり上げます



①事前に20m近くある柱を各組3本ずつ立て、仕組まれた屋根形の覆に、障子をはめ込みます



③各組の収納蔵から大提灯を出し、つるすためのロープや金具などを取り付けます



④カグラサンを使ったり、ロープを引いたりしながら、各組2張ずつ大提灯をゆっくりと引き揚げます

江戸時代の安政3(1856)年に、この地を治めていた西尾藩から質素儉約のため「胴回りの直径を一丈二尺(3・64m)より大きくしてはならない」と厳命がありました。

間浜組の世話人が入牢

二本柱から三本柱へ変わったのは、文化年間(1804〜18年)・文政年間(1818〜30年)と考えられています。このころ、柱を立てるのに船の帆柱を立てることからヒントを得て、「地輪」という地下の仕組みが考案されたとの言い伝えがあり、これが現在の大提灯や大柱に発展していく過程での大きな力となったようです。また、二本柱の提灯の骨は全て竹でしたが、三本柱の提灯はヒノキの柁まさきに変わりました。ただし、諏訪組の提灯だけは、現在も竹の骨でできています。

二本柱から三本柱へ

二本柱から三本柱へ変わったのは、文化年間(1804〜18年)・文政年間(1818〜30年)と考えられています。このころ、柱を立てるのに船の帆柱を立てることからヒントを得て、「地輪」という地下の仕組みが考案されたとの言い伝えがあり、これが現在の大提灯や大柱に発展していく過程での大きな力となったようです。また、二本柱の提灯の骨は全て竹でしたが、三本柱の提灯はヒノキの柁まさきに変わりました。ただし、諏訪組の提灯だけは、現在も竹の骨でできています。



昭和初期ごろの大提灯まつりの様子

県文化財に指定

昭和44(1969)年、提灯の規模などを理由に、6組12張の大提灯と柱組み一式が愛知県の民俗資料(有形民俗)文化財に指定されました。

そのころ、大提灯が3・64mより大きかったのは大宝組(4・1m)と上組(3・9m)だけで、間浜組は3・2mでした。当時の間浜組は、組織や氏子の数が充実しており、定めへの不満から翌年の安政4年に、規定を上回る大提灯を掲揚しました。その結果、間浜組の世話人数が入牢となり、間浜組の提灯は2〜3年間掲揚禁止になったと伝えられています。

各組の大提灯の絵と文字

12張の大提灯には、伝説や物語などを表した絵や文字が描かれています。ここでは、描かれている絵と、文字の読み方を解説します。



上組・景行天皇筑紫御征討図



中組・天岩戸図



大宝組・八咫鳥図



宮前組・大塔宮御凱旋図



諏訪組・静女鎌倉八幡宮舞楽図



間浜組・邪馬台詩図

組	絵	絵の解説	文字と読み方
上組	景行天皇筑紫御征討図	第12代景行天皇が皇位に就いたころ、大和から九州の熊襲(くまそ)を平定したときの姿	そのとくをうやまわば 敬厥徳
組	日本武尊碓氷峠御眺望図	日本武尊(やまとたけるのみこと)が、東国の蝦夷(えぞ)を平定したとき、碓氷峠で東南の方向を眺め、これまでの戦いを振り返った姿	よくかみをかんず 能感神
中組	天岩戸図 (二張)	天照大神(あまてらすおおみかみ)が、弟の素戔嗚尊(すさのおのみこと)の乱暴を怒って、天の岩戸に隠れたため、神々が困っている様子	かみのいれい 神威靈
		天鈿女命(あめのうずめのみこと)の神遊びに神々は笑い転げ、大神が戸口をわずかに開いたところを、手力男神(たぢからおのかみ)が力いっぱい引き開けようとしている様子	じょうみんあおぐ 蒸民仰
大宝組	八咫鳥図	神武天皇が熊野から大和へ攻め入り、熊野の山中で道に迷っていると、八咫鳥が道案内をしてくれたときの様子	あお、おおいなるや 嗚呼大哉
	金鷄図	神武天皇が大和の族長、長髓彦(ながすねひこ)を討とうとして苦戦していた時、金色の鷄(とび)が天皇の弓にとまり、その光に目のくらんだ敵が戦意を失った様子	こうそうのいづく 皇宗威徳
宮前組	大塔宮御凱旋図 (二張)	大塔宮(後醍醐天皇の第三皇子)が京都に凱旋し、僧兵や豪族を前に建武の新政について建議している様子	けいしんあいこく 敬神愛国
		会議場に集まった武将たちが、引立烏帽子(えぼし)に大紋正装で列座している様子	てんりじんどう 天理人道
諏訪組	静女鎌倉八幡宮舞楽図 (二張)	源義経の愛しうの静御前(しずかごぜん)が源頼朝に捕えられ、鶴岡八幡宮で頼朝の前で舞を命ぜられ、舞っている様子 武将たちが厳しい顔で見つめながら、静御前の舞と心にしみる歌に聞きほれている様子	かみのうくるところ 神所享 これきょうけいす 維恭敬
間浜組	吉備大臣帰朝祝宴図	吉備大臣(吉備真備・きびのみきび)が唐から帰朝し、その報告とともに献上の品物の目録を読んでいるところと、祝宴として雅楽に舞が演じられている様子	はいたくのすでに むつみたるをうやまえ 敬聖沢既陸
	邪馬台詩図	吉備大臣が唐の朝廷から難題を出され、机に向かって読解に悩んでいる様子と、クモが降りてきて唐の役人たちが上を向いて驚いている様子	いれいをあおげば ますますおごそかたり 仰威靈益威

※大提灯の絵は、全て提灯の骨組みの上をさけて、神や人の眼が描かれています。ろうそくを入れた時に影になり、絵全体が死んでしまうためです。誤って骨組みの上に眼を入れたため、描き直したという逸話が残されています。

マメ知識

大柱を支える地中の仕組み「地輪」

大提灯2張と屋根を支える3本の大柱にかかる力は、とても大きいと考えられますが、この大柱はどのように立っているのでしょうか。

柱立ての要領は、間浜組の漁師・仁右衛門が漁船の帆柱をヒントに考え出したといわれています。帆柱は基底部にあたるところが凸、柱をくわえこむ部分が凹となっており、この凹凸の部分をかみ合わせて固定すれば、帆柱が折れない限り倒れない原理を柱立てに応用しました。この大提灯の大柱を支える地下の仕組みを総称して「地輪」と呼び、それぞれの柱の地下2.5mの位置に埋設してあります。

長い間、人の力で地輪を掘り出し、柱を立てていましたが、老朽化による地輪の取り替え時期に合わせて、地輪掘り～柱立ての工程が機械化されていきました。



真っすぐに立てられた大柱

各組の大提灯の大きさ

組	直径	長さ
上組	約4.25m	約6.70m
中組	約4.55m	約7.00m
大宝組	約4.70m	約7.12m
宮前組	約4.25m	約6.21m
諏訪組	約3.64m	約5.91m
間浜組	約5.60m	約10.00m

各組のろうそくの大きさ

組	長さ	重さ
上組	約1.0m	約31.5kg
中組	約1.0m	約34.0kg
大宝組	約1.0m	約50.7kg
宮前組	約1.0m	約50.5kg
諏訪組	約0.9m	約37.5kg
間浜組	約1.1m	約93.0kg



拜殿前に並ぶろうそく

大提灯の歴史を守る 平成の大修理と大柱の取り替え

大提灯の張り替え

大提灯は、慶応元(1865)年から明治26(1893)年にかけて大規模な張り替えが行われ、昭和45・46年に部分修理されました。

しかし、張り替えから100年以上が経ち、保存することが困難になったため、平成6～13年度に張り替えが行われました。「平成の大修理」と呼ばれるものです。



張り替え作業中の大提灯

大提灯の張り替え年度

年度	組
平成6年度	上組
平成7年度	諏訪組
平成8年度	中組
平成9年度	宮前組
平成10年度	間浜組
平成11年度	間浜組
平成12年度	大宝組
平成13年度	大宝組

大柱の取り替え



上組大柱搬入の様子(平成23年度)

大提灯を支える大柱の損傷や劣化が著しくなったことから、平成19年度から大柱の取り替えが行われています。

大柱の取り替え年度

年度	組
平成19年度	間浜組
平成20年度	中組
平成21年度	大宝組
平成23年度	上組
平成24年度	宮前組
平成26年度	諏訪組
平成27年度	間浜組
平成28年度	大宝組

民話

おおぢょうちん

その昔、村から魔を払うために焚かれたかがり火は
闇夜に光り輝く大提灯となり、平穏無事を願った人々の思いを今に伝えています。
提灯の大きさや絵柄にまつわる逸話も残っています。

むかしむかし、一色村に村の衆から「作兵さ」と呼ばれている男がいた。男には、女房のおしんととの間に自慢の2人の息子がいた。

ある夏の夕暮れ時のこと。「海に魔ものが出たぞ」という村の衆の叫び声が響いた。それを聞いた作兵さは真っ青になった。その日初めて息子たちを漁に出したのだった。作兵さは浜にかけつけたが、波がうねりくるい牙をむいて襲いかかってきたので、逃げ帰るしかなすすべがなかった。息子たちは二度と帰ってこなかった。その後も魔ものはたびたび現れ、村のみんなは途方に暮れた。

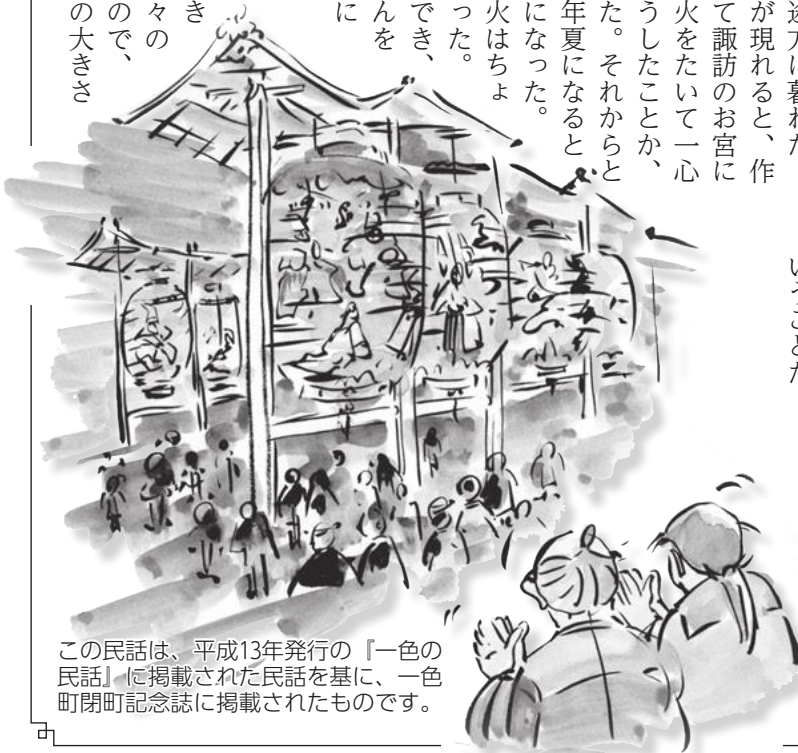
ある晩、再び魔ものが現れると、作兵さは村の衆を誘って諏訪のお宮に行き、一晩中かがり火をたいて一心に祈った。するとどうしたことか、魔ものは逃げていった。それからというもの、村では毎年夏になるとかがり火をたくようになった。

いつしか、かがり火はちようちんに変わっていった。村の中に6つの組ができ、それぞれがちようちんを作ったが、そのうちにちようちんの大きさを互いに競いあうようになった。しかし、ちようちんが大きくなればなるほど人々の負担も大きくなったので、

殿様は、ちようちんの大きさを競うことを禁じた。それでも殿様の命令に背く者が出てきて、牢屋に入れられたという。

こんなエピソードがある。ある年の夏の夜、一斉にちようちんに火が入れられたとき、あるちようちんを見て、みんなが騒ぎ出した。「変だや。目がねえぞ」。そのちようちに絵を描いたのは里仙という人だったのだが、ちようちんの骨の上に人の目を描いてしまったのだった。

里仙は自分の財産を投げ打ってちようちんの絵を描き直した。今度は立派な出来栄で、殿様も感心したということだ。



この民話は、平成13年発行の『一色の民話』に掲載された民話を基に、一色町閉町記念誌に掲載されたものです。

一色のばかぢょうちん

明治の中ごろ、知多郡あたりで一色の大提灯が「一色のばかぢょうちん 一度見ぬもばか 二度見るもばか」といわれていたことが伝えられています。これは、それほど提灯が大きいという意味で、「大きい提灯…ばかにでかい提灯…」が後に省略された表現であるとみられ、二度見る人がばかだという意味ではありません。

諏訪神社の氏子たちは、長い歳月をかけて大提灯を守り続けてきたので、「一色のばかぢょうちん」と呼ばれるほど有名になったことを誇りとしていたといわれています。



古色豊かな時代絵巻が
漆黒の夜空に浮かび上がる

お誘い合わせの上、ぜひお出掛けください

今年の一色大提灯まつり

と き 8月26日(土)・27日(日)

ところ 三河一色諏訪神社

▶26日(土)

大提灯揚げ……………午前8時
大提灯献詠俳句大会……………午前10時
奉納神楽(1回目)……………午後3時
献灯祭……………午後7時
奉納神楽(2回目)……………午後8時
※俳句大会は一色町公民館で開催

▶27日(日)

奉納弓道大会……………午前9時30分
大提灯降納……………午後5時

会場周辺は混雑が予想されます
公共交通機関をご利用ください

- 名鉄吉良吉田駅からふれんどバスに乗り、「大宝橋」下車徒歩約2分
- 名鉄西尾駅から名鉄東部交通バスに乗り、「一色大宝橋」下車徒歩約3分

問合せ 三河一色諏訪神社 (☎73・4276)
商工観光課観光担当 (☎65・2170)

歴史文化を未来へ繋ぐ

三河一色大提灯まつり シンポジウム

三河一色大提灯まつりへの理解を深めるとともに、津島市・愛西市の「尾張津島天王祭宵祭」とみよし市の「三好大提灯まつり」を紹介。歴史文化を継承するための課題などについて考えます。

対象 どなたでも

日時 8月26日(土) 午後1時～3時

場所 一色地域交流センター

内容 ラジオパーソナリティ・つボイノリオさんの基調講演、パネルディスカッションなど

定員 300人

参加料 無料

問合せ 商工観光課観光担当
(☎65・2170)



三好大提灯まつり



尾張津島天王祭宵祭